



佐藤 未雲

スペースチャイナ代表取締役

11月11日は、ずらりと並んだ1という数字が「独り者」を連想させることから、中国では「光棍節」(独身の日)と呼ばれている。

1990年代に南京の学園から始まったと言われる「光棍節」は、またたく間に社会全体に広がり、現在ではひとつの文化にすらなりつつある。大学生の独身の男女が暇つぶしに開いたパーティーが始まりだった「光棍節」、最近はこの日に独身生活に終止符を打とうとお見合いしたり、婚約したり、果ては結婚式を挙げるなどというところもあるらしい。

独身を象徴する四つの「一世」(一生一筋)という意味に解釈され、カップルにとって縁起が良いとされているのだそうだ。テレビで見た興味深い中国の結婚事情の話がある。上海のある広場で、結婚相手を募集するイベントが開催された。おもしろい

南風

独身の日

はそれが本人同士によるものではなく、結婚適齢期の子を持つ親が参加する催しであったということだ。

写真つきの履歴書には結婚の条件―学歴や収入、親と同居できるか等、さまざま項目が書かれてあり、それが木と木の間に渡されたひもに吊り下げられている。中には、わが子の履歴書を胸元にかざして歩き回る親もいて、まるで「移動広告」のようである。

履歴書を見る親たちの目は真剣そのもので、一件一件チェックし、メモしている人もいる。条件が合えば相手のことを詳しく聞き、その結果によってはお見合いの日が設定されるというものであった。

家族を大切にしている中国ならではのエピソードであるが、日本でも「婚活」などという言葉をよく耳にする。国は違えど結婚事情に大きな差はないように見える。

実りの秋、「光棍節」によって多くの幸せな家庭が誕生することを祈りたい。